

奥三河の白山（シラヤマ）行事

奥三河の白山（シラヤマ）行事については、前田速夫の「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）にも紹介されているが、[山田維史の論考「夢幻能の劇構造と白山信仰私考・・・信仰のこころとかたち」](#)というホームページがあるので、まずその中から私の注目する部分のみをここに紹介することとしたい。山田維史は次のように述べている。すなわち、

『1991年2月、NHK・TVが『花祭幻想』というドキュメンタリーを放映した。奥三河の山間部に花祭りという民族芸能が伝承されている。この祭りは早川孝太郎氏の大著『花祭』でつとに知られていたが、疫病や飢饉の年などに花祭りと同時に行われていた「白山（シラヤマ）行事」が、安政3年（1856）以後とだえていた。その花祭りと白山行事、すなわち大神楽が134年ぶりに復活されたのである。』

『花祭りの意義は、冬枯れの時期に萌え出づる春の到来と五穀豊穰を祈願し、同時に病気のため命乞いをする者の立願を果すことにある。そして、前記の伊弉冊尊（いざなみのみこと）の葬祭儀礼とも無縁ではないと思われる。』

『村の広場に、湯立神事の大釜を中心に舞戸をしつらえ、並んで、檜と青竹の垣を方形にめぐらし、外界と完全に遮断した白山（シラヤマ）が築かれる。青竹の葉叢には紙垂（かみしで）が飾られる。舞戸はこの世、白山（シラヤマ）はあの世。その間を無明の橋がつなぐ。』

白山（シラヤマ）の中央にはさらに白布でおおった4柱が立てられ、鏡を掛け、顕形（けぎょう）の帯を結びさげた榊の神籬（ひもろぎ）を立て、梵天と竜頭を掲げる。

この神籬（ひもろぎ）には特異な天井がとりつけられ、一般的には白蓋（びゃっけ）、あるいは天蓋と称されるが、豊根村（愛知県北設楽郡）のものは独特の切り込みのある純白の紙垂（かみしで）を方形行燈状に無数に下げ、「雲」と言われている。この「雲」に八百万（やおよろず）の神が降るのである。そして、白山（シラヤマ）の雲と舞戸（この世）との間に白い帯が渡される。神々はこの帯をつたって、あの世とこの世とを自由に往来するのである。』

（注：前田速夫の「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）によると、『白山（シラヤマ）は早朝に畑の中に作られ、夕刻になると、檜笠をかぶり五色の花をつけた杖を持ち、白装束となった男女が一団となり、禰宜の先導で舞戸をめぐってから、松明を先頭に「無明の橋」を渡って、シラヤマの中に入って行く。』・・・とあるが、[古戸花祭り保存会編の「花祭り」という資料によると、](#)

『神楽を行う場所は、なるべく人家に近い平坦な一反歩ばかりの空き地を選ぶのだが、それには小さい山に接近していることが条件で、適地を選び、六間四方に十二本の柱を立てて屋根を葺いた舞庭（まいど）を作る。十二本の柱は十二支を象り、四方に七五三を張る。それに平行して七十日頭の梵天を飾るびゃっけ、湯

蓋の飾り付けをする。舞庭ができると次に川と山との設備に掛かる。舞屋の子丑寅のほうに川または沢があればよし、なければ、深さ四から五尺、幅が一丈か二間くらいの北より東にかけて流れる川の形を掘る。これを三途の川と名付け六寸角の橋を掛け、その下に木綿幅で同じ長さの白木綿を引いて橋する。このうえに経文の本を並べます。これを三途の川の経文の橋という。この橋を渡ると白山（シラヤマ）となる。山はおよそ五、六畝で中に常磐木が群生していればよし、なければ、桧・榎・香など常緑の木を伐って来て植える。この立木の間に道を付ける。山の周囲に白木綿を引き回し、木の枝々には幣をつるして白山（シラヤマ）という。設備ができると、翌日から祭りに掛かるのである。』・・・とある。）

（注：前田速夫の「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）によると、シラヤマに入る男女の年齢は数え61歳の本卦還り（還暦）の人で、これに恢復の見込みの無い重病人が加わることもあった。）

『 さて、大神楽次第を詳述する余裕がここにはないが、その大要を述べれば---

まず「釜払い」が行われる。この儀式の後、人間の一生には四度の大願がかけられると規定し、それを象徴化した祭儀がつづくのである。

第1に、「舞い上げ」（一般的には「生れ子」とも言う。以下、かっこ内は同様に）。これは出産をめぐる儀式で、本来は新生児の手をとって舞うものだが、いまは子供たちの舞いとなっている。

第2に、「四ツ舞い」（生れ清まわり）。いわゆる元服の儀式。13歳に達すると、それを節目として新たに生れかわることを意味する。

第3に、「花のみぐし」（扇子笠）。40歳前後の厄払い、あるいは年祝いを想定し、扇子を笠にして舞うのである。

（注：前田速夫の「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）によると、シラヤマの「浄土入り」は、初日から順次行われる誕生儀礼の「生まれ子」、13歳で神の氏子としての資格が与えられる「生まれ清まり」、40歳前後の折り目を示す「扇子笠」が終われば、その後で行われる。すなわち、祭場が違うようだ。シラヤマが祭場となるのは「浄土入り」とそれに続く「山見鬼」などの儀式であり、その他の「舞い上げ」「四つ舞」「花のみぐし」の三つの舞は、神社の近くに作られた祭場で行われよう。一つの例として東栄町河内の「花祭り」の祭場を紹介しておく。東栄町河内の「花祭り」のホームページは[ここをクリックしてください！](#) 祭りの次第も掲載されています！各演目の解説はここというところをクリックしてください！）

『 そして第4は、「白山入り」（浄土入り）。厄年の人は扇子笠、還暦の人は檜笠をかむり、死装束、花育てと称する葬列をつくって、禰宜に引き連れられ白山（シラヤマ）入りする。

『 やがて山見鬼が死者を救うべく白山（シラヤマ）に入り、様子を窺い、再び出てくる。ついで清めの獅子が白山（シラヤマ）入りして、白山（シラヤマ）を地獄から極楽に変える。そして、山見鬼が五色の鬼を引き連れ白山（シラヤマ）に入り、死者を救い、白山（シラヤマ）を破壊して神に帰ってもらう。死者たちは再びこの世にもどり、湯立の釜

の湯を笹竹によって振りかけてもらう。すなわち産湯を使い、生れ清まりの祓いの儀式である。』

『 以上の一連の行事が後、最後に、人々は舞いをまって喜びあい、祭りは終了する。』
・・・と。

以上見たように、「白山（シラヤマ）行事」は極めて象徴的な擬死再生の儀式である。

なお、舞手（舞子）の立場から書いたブログがあるので、それをここに紹介しておきます。奥三河の白山（シラヤマ）行事の実態が良く理解できるでしょう。

<http://kenta.toyone.org/2010/01/1.html>

筆者曰く、「通常、親族が亡くなって一年、喪が明けるまでは花を舞うことが出来ません。我が家も、祖母、伯父を亡くしており…。通常ならば、舞えません。しかし、拝殿で朝10時に祈祷して、お祓いを受けることで、花の担い手となることが出来ました。」

<http://kenta.toyone.org/2010/01/2.html>

筆者曰く、「舞もピークにさしかかり… さあ!!!湯かけだあーー！！！！テンションハイの舞手からぶちまけられた熱湯が…。その後も、激しきお湯しぶきが会場を包み込みます。ちなみに、一晩煮立てた釜の湯が無くなってきたら、継ぎ足されます。冷水が。上黒川の湯囃子は、4回くらい継ぎ足しますからねえ...(笑) 冷水を浴びる観客の皆さんは「つめたっ！」って思うかもしれませんが、既に1時間以上も舞い続けた我々舞手にとっては、サウナに入った後の冷水浴のようなものなのです☆めっちゃ気持ちいい(笑)」